

(国際会議報告)

「農薬と有益生物」研究集会

——(1) IOBC/wprs ワーキンググループ集会と生態毒性学国際会議に参加して——

社団法人日本植物防疫協会研究所 ^{もり}森 ^{かつ}克 ^{ひこ}彦
農林水産省農業研究センター ^{ひら}平 ^い井 ^{かず}一 ^お男

1996年10月9日から16日まで、イギリス・ウェールズ州カーディフ市で開催された標記会議に参加する機会を得たので、印象を交えて報告したい。

10月9日から12日までIOBCのワーキンググループ集会がウェールズ大学において、14日から16日まで生態毒性学国際会議(Ecotoxicology Conference)がカーディフ国際会議場でそれぞれ開催された。

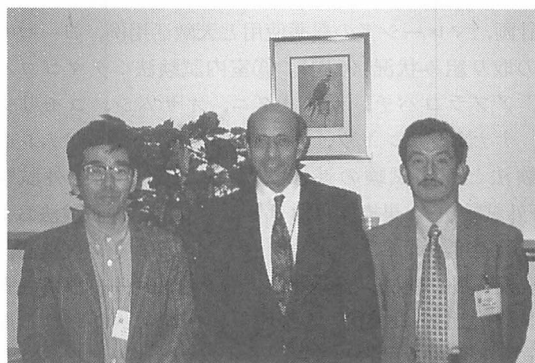
IOBC(国際有害動植物生物的総合防除機関)には六つの地域支部があり、そのなかの一つ、西ヨーロッパ支部(wprs)に「農薬と有益生物(Pesticides and Beneficial Organisms)」のワーキンググループがある。ここでは、ドイツ、イギリス、スイス、オーストリア、オランダ、ベルギーなどの西ヨーロッパ各国の政府研究機関、大学、農薬企業あるいはコントラクトラボ(農薬企業から依頼された各種試験を実施する専門の研究会社)の研究者が、試験方法や試験結果の評価法などについて検討を行っている。このワーキンググループでは1年に一度集会をもち、各国のメンバー間で情報交換をしている。今回の集会では、アブラバチ、タマゴバチ、クサカゲロウ、オサムシ、カブリダニ、クモを対象にした研究発表が多かった。内容も方法論、対象生物の比較、薬量の検討など、テーマも多岐にわたっていた。国別ではドイツからの発表が特に多く、この分野で最も研究の進んだ国と思われた。日本からは筆者の一人、平井一男が「ズイムシアカタマゴバチに対する殺虫剤の影響」について発表した。

これらの発表とは別に、各テーマごとに試験方法など個々の問題点を少数の関係者が集まって検討を行うグループ(リングテストグループと呼ばれる)の集まりがいくつかあった。ここでは問題点を絞り込み、調査および検討をメンバーで分担し、得られた結果についてお互いに意見を交換し問題点を段階的に解決していた。リングテストグループの検討結果は直ちに全体会議で公開され、ワーキンググループ全体の合意を得ていた。このグループでは、各国の若手の研究者の活躍が印象に残っ

た。

翌週開催された生態毒性学国際会議はIOBCワーキンググループのメンバーに加えて、アメリカ、オーストラリア、マレーシア、フィリピン、パキスタン、ケニア、エチオピアなど世界各国の研究者が集まった。この会議では、IOBCのミーティングで発表された農薬の影響試験の方法およびその結果のみならず、各国あるいは各地域の影響試験の考え方や、発展途上国における影響試験の啓蒙および普及活動の紹介があった。また、室内試験以外にも、圃場における農薬の影響調査などの発表もあった。ここではアメリカとヨーロッパ各国の担当者の中で活発な意見交換があった。

周知のように、ヨーロッパでは以前から環境問題に対する関心が極めて高く、このワーキンググループも設立されてから既に20年以上経っている。わが国のこの分野での研究はまだ始まったばかりで、これから検討すべきことはたくさんある。国際協調の点からも、ヨーロッパでの研究成果はわが国の農薬の、有益生物に対する影響調査の確立に大いに参考になると思われる。今回、これらの会議に参加して、現在の問題点やこれからの方向性について見聞したことは大変有意義であった。



左から筆者の平井、ワーキンググループのリーダーのハッサン博士、筆者の森